



TITLE:

<批評・紹介>「宮中檔案雍正朝奏摺」

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. <批評・紹介>「宮中檔案雍正朝奏摺」. 東洋史研究 1978, 37(3): 447-450

ISSUE DATE:

1978-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153707>

RIGHT:

宮中檔雍正朝奏摺

第一輯 中華民國六十六年十一月 臺北
國立故宮博物院 十六開本 九二頁
・第二輯 同十二月 九三四頁

『宮中檔案雍正朝奏摺』すなわち『雍正硃批諭旨』（乾隆三年刊）の史料價値については宮崎博士の「雍正硃批諭旨解題―その史料價値―」（東洋史研究一五、四・宮崎市定アジア史論考）下巻、所收）なる明快な論文がある。未刊の『雍正硃批諭旨』については、曾て私は『雍正硃批諭旨』の原文書について（東洋學報五七、一・二合併號・『中國史研究』第三、所收）という論文で、未刊の『雍正硃批諭旨』の史料價値について論じたことがある。

未刊の『雍正硃批諭旨』の刊行については、清朝研究者の齊しく待望するところであったが、今回いよいよ刊行の運びとなり、民國六十六年十一月（一九七七年）第一輯が刊行され、十二月には第二輯が上梓された。引續き續々と印刷に付し、三十輯を以て完了する豫定であるという。洵に學界のため慶賀に堪えぬところである。

未刊の部の若干はすでに『文獻叢編』・『史料旬刊』・『故宮文獻』・『關於江寧織造曹家檔案史料』などに發表されているが、それらは極めて僅少である。現在臺北の國立故宮博物院には二萬三千餘件（約一千名のもの）の奏摺を蔵している。乾隆三年に上梓されたものは約七千件（二百三十二名）であるから、約一萬六千件が未だ印刷されずにいたわけである。今回は請安摺および重録複本を除き、すでに刊行されたものも併せて二萬一千件を三十輯として印刷に付

する豫定とのことである。（第一・二輯には重録複本は印刷されているが、第三輯以後は省略する由）各冊十六開本、九百頁を超過する大冊で、最初に目錄がある。目錄には奏摺を上った年月日、官職名、人名、奏摺の内容を示す題目が順次示されている。また乾隆三年既刊のものはその原函冊數を示している。奏摺は二段に組まれ、年代順に排列されている。ただ年があつて月がなく、月あつて日附のないものはそれぞれ該年月の後におかれている。今回の奏摺の特色は、乾隆三年の刊本が奏摺、硃批ともかなり潤飾が加えられ、また奏摺の中には文章が削減されたものがあり、あるいは機密に屬するものは全部省略されたものがあるに反し、前述の二萬一千餘件の奏摺硃批がすべて原文書のまま寫眞に撮影され、しかも奏摺は墨色、硃批は朱色をもつて印刷されていることである。雍正帝の達筆の草書體の硃批は、偉大な獨裁君主の風格をそのまま現わしている。ただかなり縮小して印刷されたため、判讀し難い所があるのは残念に思われる。

奏摺は臣僚の天子への親展狀であるから、上奏者自身が書くのが建前であるが、文字を識らぬ武官等もあり、幕友が代筆したことは公然の祕密である。しかし極祕に屬するものは、已むをえない特殊の場合を除き、上奏者自身が書かなければならなかった。田文鏡の多數の奏摺の中にはつたない文字で認めた若干の奏摺があるが、あるいは田文鏡自身の書いたものであるかもしれない。『雍正硃批諭旨』の中には上奏者自身が自ら奏摺を認めたと書いている者もある。今回の新版書には清代官僚の筆蹟をかなり含むものと思われるのである。

なお今回の新版書では擧頭がかなり、みだれていることも一つの

特色としてあげられる。(第一輯十四・十五頁参照) 擧頭を誤ると、科學では合格は不可能であり、官僚は彈劾を免れなかったであろう。しかし雍正帝は、上意下達をスムーズにし、獨裁権を確立するためにいわゆる奏摺政治を行なった。文官ならば知府以上、武官ならば總兵官以上の者に對して、奏摺を上ることを義務づけた。さきに觸れたように武官には文字を知らぬ者もあり、雍正帝は奏摺の形式については、寛容であつた。公文書であれば問題にされるが、奏摺は全く臣僚の天子への私信に屬するものであり、形式よりも内容の如何を問題にしたのである。李衛なども奏摺には擧頭の形式を誤り、雍正帝から注意されているが、しかし、叱責を蒙るようなことはなかつたのである。乾隆三年の刊本では、擧頭の誤りは全部訂正されている。

次に注意すべきことは、臣僚の奏摺に對して雍正帝がその文字を朱筆をもつて改め、あるいは塗抹した所も、そのまま印刷されていることである。塗抹した箇所は乾隆三年刊行のものには見られない。この塗抹した部分に重要な意味をもつ資料があることは、前記の拙稿で指摘したところである。(雍正帝の信頼の篤かつた高其倬が雍正帝の信頼を失つた年代の考定)

なお今回の新版書の大きな特色は、乾隆三年の際には、當時の政治的情勢から、省略して印刷されなかつたものも、印刷されていることである。『雍正硃批諭旨』は、これまで已録、未録、不録の三種に分れていた。已録とはいうまでもなく乾隆三年に刊行されたもの、未録とは出版するため潤飾を加え、楷書で清書しながら、未だ印刷されていないものである。不録とは當時の政狀から、政治に微妙な影響を與えるものと考えられ、天子に伺いを立てた結果、出版

しないことになつたものである。現在、臺北の故宮博物院所藏の不録の奏摺には、その理由が紙片に書いて奏摺に貼附されている。これらの不録の奏摺も今回は印刷されているが、惜しいことに、その紙片の文字は印刷されていないようである。當時の政治情勢を知る上において、重要な手掛りを得ることが出来るので、この點が惜しまれる。因みに文獻叢編にはこの紙片の文字が印刷されている。

次に新版書の特色は、滿洲出身の臣僚の漢文奏摺に對して、開々雍正帝は滿洲文字をもつて硃批を與えている場合があるが、その滿洲文の漢譯を附していることである。滿洲文を解せぬ研究者には便利である。

なお新版書について私見を述べるならば、請安摺が一律に削除されていることが惜しまれる。請安摺とは天子に對して御機嫌を伺う奏摺で、「請聖安」という僅か三文字の書かれた奏摺である。これに對して雍正帝は「朕安」という僅か二字の硃批を書いて返すのが普通である。もつとも雍正帝がその臣僚に對して注意したいこと、あるいは前回その臣僚の奏摺に對して書き忘れたことを追加して書く場合もあるが、それは特別な場合である。

ところが雍正帝は特に關心の深い者に對しては特別に優渥な言葉を加える。例えば福建水師提督王郡の請安摺に對しては、雍正帝は常に「你好麼」とか、新年であれば「新春大禧」とかいった言葉を加えている。王郡は文字を識らない武將ではあるけれども、その人柄が雍正帝の氣に入つた點もあるが、王郡が水師提督という、特別重要な官職にあつたことも、雍正帝が特に王郡を愛顧した理由であるようである。それは、この頃は、いわゆる倭寇などの活動の時代から程遠からず、また洋盜の活躍もなかなか盛んで、海防は重要な

關心事の一つであり、しかも海防に熟した海軍軍人は甚だ得難く、雍正帝はその人選に苦心していたからである。このように考えると、請安摺のうちには、雍正帝の人となりや、當時の國狀を考慮の上において、重要な資料を提供するものがあるといえるであろう。このことは江寧織造曹類等についてもいえることである。

第二には奏摺を撮影した時のミスと思われるが、奏摺の最後にある僅かの文字が脱落している場合がかなりあるようである。時には編者が補筆している箇所もあり、それは字體ですぐ分るが、補っていない箇所もある。(第二輯五三三頁下段六行には旨の字を脱落している。)

第三には、乾隆三年刊本にはあるが、本書には缺けているものがある。例えば、既刊石印本二九冊に含まれる田文鏡の奏摺である。雍正二年四月初六日「河南布政使田文鏡、奏爲據事陳明仰祈睿鑒事」、同日「河南布政使田文鏡、奏爲欽奉上諭據事奏聞事」の二件は本書では見ることが出来ない。また『文獻叢編』『岳鍾琪奏摺』に掲載されているが、本書に缺けているものがある。雍正元年十一月十八日「四川提督岳鍾琪奏報剿過爾根台吉逆番緣由摺」も見られない。

次に北京故宮博物院明清檔案部編『關於江寧織造曹家檔案史料』にも三十一篇の雍正奏摺を含む。そのうち滿文から翻譯したものは十九篇ある。これらは勿論、新版書には含まれていない。漢文奏摺のうち三篇は雍正二年正月初七日、四月初四日、五月初六日のもので、新版書にもこれに對應するものがすでに印刷されている。これらを比較すると題目は少々異っているが、同事件のものであることは明白である。新版書のものはいずれも潤飾を経た後のもので、文

章も雅であり、達意のものである。また奏摺硃批ともにきちんとした楷書に書きかえられている所からそれはすぐ判明する。これに反して曹家檔案史料のものは、活字でしかも擡頭もせず印刷されているが、原文書のままのものであることは、前者とその文章内容と比較すれば、自ら明白である。因みに四月四日の原文書の人名物林達は、新版書では烏林達と訂正されている。これで見ると、臺北故宮博物院的江寧織造曹類の奏摺は潤飾を加えたもので、原文書は北京に残されていることが判明するであろう。

また『史料旬刊』にも「雍正安南勘界案」・「李梅等散佈偽劄」・「許英賢賣藥案」・「羅教案」等々に關する雍正時代の奏摺をかなり多く掲載しているが、それらはみな潤飾されたものである。(重録復本)しかし乾隆三年の刊本にはすべて含まれていない。また『史料旬刊』の奏摺には雍正二年七月までのものが含まれていないため、今回の新版書(第二輯は雍正二年七月までのものを含む)と比較検討することが出来ないのは残念である。従って現在のところ、新版書には原文書と重録復本の雙方があるのか、あるいはどちらか一方だけしか存しないか、それとも兩方とも存しないかは、全巻少なくとも數巻が出版されないと、何ともいうことが出来ない。

『宮中檔雍正朝奏摺』は本次の戰爭中、北京から轉々と中國各地を移動し、ついに臺灣の臺中に、それから現在の臺北に運ばれて來たのである。本書脱落のもの若干は、その原文書あるいは少なくともその鈔本が北京に残存しているであろうことをさきに指摘したが、若干のものは移動中散佚したものがあるかもしれない。また今回の編輯中、他の箇所にも紛れこんでいるかもしれない。整理中、たばねられた奏摺を不用意にばらし、年代の書いてないものは、その年代

が全く分らなくなったものも若干あるとのことである。

なお『宮中檔雍正朝奏摺』は同一の奏摺でも『文獻叢編』と今回
の新版書では目次の題目が異なっていることは注意を要する。『文
獻叢編』「清雍正朝關稅史料」不錄奏摺中の雍正元年十二月十二日
「江西巡撫裴率度奏報修造九江關署摺」は、新版書第二輯一五一頁
には、雍正元年十二月十二日「江西巡撫裴率度奏陳會商移關摺」と
なり、倉卒に考えると、全く別箇のもののようにであるが、内容は全
く同じで、一字一句も變ったところは見られない。

以上簡單ではあるが新刊『宮中檔雍正朝奏摺』について紹介し、
併せて乾隆三年の舊版、『文獻叢編』その他に掲載のものとの相違
について述べ、若干の誤謬を指摘した。しかし、それは瑕瑾であり、
本書の出版が學界に與える貢獻には大なるものがある。本書の
利用により、清朝史の研究は、さらに深く掘りさげられ、大きな進
展を期待しうものと思う。ただ先きに述べた如く、本書には若干の
缺落がある。それらは將來補遺として増補されることを望んでや
まない。

なお最後に、奏摺の原文書を見ようとする方のため、興味深い
一つの事實を記しておきたい。雍正帝は毎日夜おそくまで、數十通
の奏摺を披覽して硃批を加えたが、最後には疲勞を覺えたのであろ
う。「燈下所書字畫潦草。莫訛」などと辯解がましい硃批を書いて
いるところがしばしばある。そのためであろうか、朱墨で指先を汚
すこともあったらしい。雍正七年十一月初七日河東總督田文鏡の奏
「臬司關繫綏重職守務在得人據實奏明仰祈聖鑒以收實效摺」（乾隆
三年刊石印本三三冊八五枚表、原奏摺は故宮博物院整理番號 00663）
に對する雍正帝の硃批中に帝の指紋が残っている。朱の指紋である

から、雍正帝のものであることは間違いないであろう。雍正帝の政
治に對する勤勉さが、この指紋に現われているように思うのは筆者
だけであろうか。
(佐伯 富)

坂出祥伸編 秦漢思想研究文獻目錄

B 5 判 一三七頁 四八〇圓 送料一六圓

日本と中國の一九七六年までの思想研究および関連諸分野の
雜誌掲載論文約二五〇〇點、單行書約三八〇點を收め、前者は、
大きく人物・著作別項目と主題別項目に分け、更にそれぞれ三
四と一四の小項目に分類して探索に便ならしめた。論文題名に
は所載雜誌名、卷號、發行年を示したほか、後に論文集など單
行書に收められたものを備考欄に注記する。附録として「雜誌
掲載論文の所藏機關を調べる方法」を添え、初學者向きに配慮。
また、參考書リストは中國研究者一般に役立つ。

千五六四 吹田市山手町三丁目三番三五號

關西大學出版・廣報部

電話(〇〇)三八一三

振替 大阪 二六壹